

# 現代における「身分」と教育

——「文化的再生産」への視角——

秋 永 雄 一

## 1. 文化的再生産：社会的格差の「身分」的再生産

今日、現代社会における新たな「身分」の形成と教育・学歴の關係に目が注がれつつある（たとえば、天野，1983；園田，1983）。

身分は、マックス・ウェーバーの考察にもかかわらず、以後の社会学の展開のなかで正面から取り上げられることはなかった。身分制社会を打破した近代社会においては、身分は残存する過去の遺物であり、階級に比べれば副次的なものとなされてきたからであろう。「身分」は歴史上の範疇に属し、社会学の概念ではないという受けとめ方が一般的である。ウェーバー自身の身分に関する記述も、概念としては通歴史的なものとして設定されているにもかかわらず、「伝統的支配」にふれた部分に集中しており、事実上歴史的な範疇として扱われているとあってよい。しかし、ある歴史家の次の記述に示されている身分制社会の諸特徴は、現代社会に全く無縁なものと言えるだろうか？

〔身分制社会の特徴の一つは〕それぞれの個人がなんらかの身分集団に属するものとされ、いろいろな身分が一種の階層秩序（ヒエラルヒー）をなしているところにある。……そして、おのおのの身分は独自の権利や名誉と結びつけられていたから、身分制社会は〈特権のシステム〉としての特徴を示す。……身分制社会は、……これを支配のシステムという意味で、権力の配分関係という見地から考察するならば、公的権力の私的な領有……によって特徴づけられる。……身分制社会は、支配・隷属という縦の人間関係とともに、同じ身分に属する権利仲間どうしの横の結合体としての社団 corps の形成を必然的に伴[う]……。

（成瀬治，1985，強調点は引用者）

引用文中の強調部分に示されている身分制社会の特徴は、現代では業績原理と絡み合っ現れており、それだけに身分制社会における身分のような明白な標識をもたない。しかし、これと同等の機能を果たすものの存在を現代社会のなかに見て取ること

東京大学大学院

## 現代における「身分」と教育

はできないだろうか。それをここでは現代における新たな「身分」（誤解を招きやすい表現だが）と呼ぶことにすれば、その形成には、教育と学歴、学歴に結びついた職業資格と職業が大きく関与しているであろう。

フランスの社会学者ピエール・ブルデューが教育に着目するのも、業績原理の象徴とされた教育や学歴が、本来的に帰属原理に立脚する新たな「身分」の形成に深くかかわっているという認識に立つからである。彼が執拗に追究しているテーマは、業績主義を掲げる現代社会において、目に見えにくいかたちで成立している新たな「身分」と、その格差にもとづく社会的不平等の正当化の問題である。「身分」の成立と一定のライフ・スタイル（生活様式）の共有とは不可分であり、人々の趣味・嗜好に導かれるライフ・スタイルの差異が文化的格差として人々を「身分」的に分け隔て、社会的格差を正当化する。このような彼の理論的視角は、ウェーバーの「支配の正当性」や「階級と身分」に関する議論<sup>(1)</sup>を現代において引き継ぐものだといえる。身分の世襲が禁じられ、私有財産の相続にも一定の制限が加えられている現代において、子が親から引き継ぐ特権は何か——この問題を『遺産相続者』という象徴的な題名をもつ著書において文化的な不平等の問題として取り上げて以来、『再生産』を経て『ラ・ディスタクシオン』（「人を分け隔てるもの」とでも訳すべきか）に至って、彼のテーマが、現代における新たな「身分」の形成の問題にあることが明らかになる。彼の研究を「文化的再生産論」というとき、それを社会移動・地位達成研究とは対照的な視点（すなわち「移動」の開放性への着目に対する閉鎖的な「再生産」の側面への着目）に立つものとしてのみ捉えるのは、一面的な理解にすぎない。次の記述に注目したい。

ここで提示されている経済的・社会的諸条件の領域とライフ・スタイルの領域との関係についてのモデルは、マックス・ウェーバーの階級と身分の区分にもとづき、それに再検討を加えたものである。このモデルは、フランスという個別事例を超えて……階層分化したあらゆる社会にもあてはまるものであろう。

(Bourdieu, 1984, xii)

## 2. ブルデューにおける文化の把握

ブルデューを中心にした「文化的再生産論」を「階層と教育」研究の流れの中で検討するにあたっては、文化の概念を位置づけておく必要がある。

「階層（文化）と教育」研究と、それが連なる社会移動・社会的地位達成のなかで一番立ち遅れていると思われるのは、「文化」に関する理論的考察である。最も理論的に整備され、それにもとづく操作概念による調査の枠組を備えているはずのSSM調査でも、「文化（的資源）」に関する理論的考察はあまりおこなわれておらず、その変数化の方法には、曖昧さが感じられる。もちろん、「文化」を変数に組み込むことの困難さと調査の主眼のちがいにもよるのだろうが、分析全体（富永編，1979）の中で

教育・学歴に置かれている比重の大きさからすれば、たとえば、次のいくつかの疑問は理論的に検討しておく必要がある。「文化的資源」の保有が「教育年数」や「学歴」の程度によって示されるとする理論的根拠は何なのか？ 逆に、「学歴」は「文化的資源」の保有のみにかかわるのか否か？ そもそも同じく「保有」といっても、「物的資源」「関係的資源」「文化的資源」の、それぞれの「保有」の様式は同じなのか違うのか？ もし、違うとすればどのように違うのか？

ブルデューの研究は、「階層と教育」研究で立ち遅れていた「文化」の理論的位置づけに大きな示唆を与える——というよりも、むしろ「階層と教育」研究（さらには、社会移動・地位達成研究）に欠落していた「文化を介在させた社会的不平等の正当化」の問題に目を向けさせる。たまたま彼の研究が「高等教育機会」という研究対象を「階層と教育」研究と共有していたからといって、教育機会の社会階層間格差を説明する要因のひとつとして「文化」が位置づけられていたのではないという点に注意する必要がある。

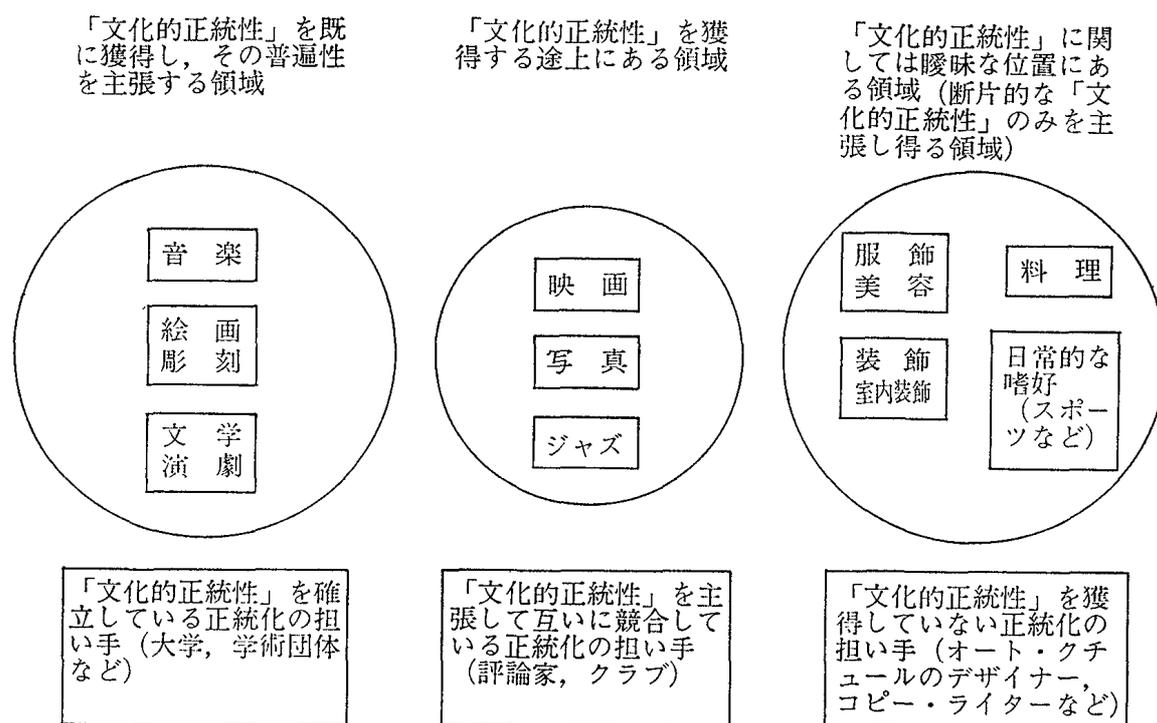
文化に社会的不平等の正当化機能があるというブルデューの議論が成り立つためには、各「文化」のあいだに価値序列が形成されていなければならない。それをここでは「文化威信の序列」と呼ぶことにしよう。

しかし、そもそも「文化威信」なるものは個人を超えて社会的に実在するのだろうか。仮に実在するにしても、それぞれの「文化」は文化威信によってどのように序列化されているのであろうか。また、その「序列」を支える社会的な基盤は何だろうか。

日常的には、ある「文化」は別の「文化」よりも高級だ、というような社会的評価（文化威信）の序列は実在するように感じられる——かつてある演歌歌手は、ある音楽番組で自分の持ち歌がクラシックの音楽家によって歌われるのをききながら、「こんな歌を歌ってもらえるなんて……」を連発しながら、ひどく恐縮していた——なぜ「恐縮」するのだろうか？「学会」ということばをきくと、それとかかわりをもたない人々は、自分たちの生活と直接的には関係はないにしても、「学問」の場として、一定程度の敬意を払う——なぜ「敬意」が払われるのだろうか？

ブルデューは、実生活上の必要からの距離の大きさによって測られる文化価値が経済的な価値とは相対的に自立したかたちで成立しており、文化威信はその文化価値の大きさによって定まると捉える。そして、大きな文化威信をもつ「文化」は、他の諸諸の「文化」の位置を測る尺度として用いられることにより、普遍性を主張し得る「文化としての正統性」を獲得する。それぞれの「文化」の、「文化としての正統性」を主張する担い手・機関の社会的位置と性格は、それぞれの「文化」にかかわる人的資源の動員力（現有勢力および教育機能の確保による勢力維持の可能性）と、それぞれの「文化」を「物」のかたちにしてどの程度集積し、独占しているかによって定まる。たとえば、大学は、恒常的な人材養成機能をもち、物としての「文化的な財」を集積し、しかも、それへの接近機会を一定の資格要件によって制限している。それゆ

現代における「身分」と教育



（出所）ブルデュー，1968，p.125. ただし，訳書には従っていない。

図 1

えに，大学は教育的権威，文化的権威を有するものとして社会的認知を受け，大学に足場をもつ「研究分野」，より広くは「文化」に，高い威信が与えられることになるのである<sup>(2)</sup>。これをまとめれば，ブルデューの描いた図1になる。

### 3. 文化威信と職業威信

ライフ・スタイルは，一方において「文化」への個々人の趣味・嗜好に導かれてかたちづくられると同時に，それを支える経済的・社会的条件による制約も受ける。

趣味・嗜好は，後天的に習得されたものでありながら，個人のそれまでの意識的・無意識的な経験の総体を集約したものなので，あたかも個人に先天的に備わっている資質とか生得的な属性の現れのように映じやすい。趣味・嗜好の差異に上下の格差が生じるのは，それぞれが志向する「文化」のあいだに「洗練さ」と「俗っぽさ」を軸にした序列（文化威信の序列）が形成されているからである。こうして，個人を超えて成立している文化威信の序列は，個別の「文化」への趣味・嗜好を介して，個々人のライフ・スタイルの格差を生み出す一方の軸を構成する。

ライフ・スタイルを支え，それを制約する経済的・社会的条件の格差が，それぞれのライフ・スタイルのあいだの格差を生み出すもう一方の軸を構成する。ここでいう「経済的・社会的条件による制約」とは，単に趣味を追求するために必要とされる「物としての文化的な財」の購買力の高低（おもに，所得，財産に規定される）を意

味するだけではない。むしろ、それ以上に、各職業がそれに固有のライフ・スタイルを要求するという意味が含まれる。それぞれの職業のあいだには威信の序列が形成されており、この職業威信の序列は、当然、各職業に固有のライフ・スタイルにも反映する。

このように考えれば、ライフ・スタイルには、文化威信の序列と職業威信の序列が二重に反映していることになる。この二つの序列は、必ずしも重なり合っておらず、互いに独立して形成されている。しかし、そうであるからこそ、たとえば、高い文化威信をもつ「文化」を志向し、高い職業威信をもつ「職業」の要求する「ライフ・スタイル」は、双方が互いに補強しあって、強固に「身分」的な色彩を帯びることになる。

教育や学歴は、以上のような「職業—生活様式—文化」のつながりに、どのようにかかわってくるのであろうか。ここで、教育を「手段性」と「自己目的性」の二つの側面に分けて考えてみよう。教育の「手段性」とは、教育以外の享受対象を獲得するための手段としての側面である。その場合、獲得対象になるのは、富永健一（1979）の用語でいえば、「職業威信」だと考えられる。「物的資源」（所得、財産）が獲得対象になることは、あまりないであろう。「物的資源」自体が享受の対象になることは少ないからである。生涯賃金や初任給の学歴間格差はせばまってきているし、職業選択が、初任給の高さよりも能力発揮の機会や企業イメージなどに左右される度合いが高まってきているので、「教育（手段）→所得（目的）」という直接的なつながりが主観的に意識される度合いは弱まっているだろう。財産を獲得するために教育を手段にするというつながりも見えにくい。たとえば、「学歴を手段にして資産家と姻戚関係を結ぶ」というような、学歴取得以前の段階で主観的に思念された野心の実現可能性は、結果として取得した学歴を通じての客観的な実現可能性よりも、低くなるであろう。「手段的な関係的資源」としての「勢力・権力」（power）にしても、それ自体は享受対象ではない。「人を動かし得る力」は、それに淫するというかたちで享受の対象となる自己倒錯的な契機を多分に含んでいる。とはいえ、本来、手段的な「勢力・権力」が「手段としての教育」の目的になるというつながりは、やはり成立し難い。これらに比べれば、「報酬的な関係的資源」としての（職業）威信は、それ自体が享受の対象であるがゆえに、「教育（手段）—職業威信（目的）」の連関は極めて明白にみえやすい。このようにみれば、教育は、何よりも享受対象としての職業威信の獲得を目的とする、という点において、その「手段性」が認識されるといえるよう。そして、「手段としての教育」の有効性に関する序列は、職業威信の序列を反映する。「手段としての教育」は職業威信を介して職業につながり、それによってライフ・スタイルを支える経済的・社会的条件と関連をもつことになる。

では、「文化的資源」としての知識・技能・教養の習得が目的になり、教育がそのための手段に位置づけられる、ということはないのであろうか。一見したところ、こ

## 現代における「身分」と教育

のつながりは明白で、人はこれによっても動いているように思える。しかし、知識・技能・教養の習得は、教育の「手段性」ではなく、教育の「自己目的性」の側面にかかわるものといえる。ブルデューが見事に明らかにしたように (Bourdieu, 1977; ブルデュー, 1986), 学習という営為は、あることの学習それ自体が自己目的化され、学習対象への没入を (意識的にも無意識的にも) ともなわないかぎり、ハビトゥスとして身体化され、身体に定着することはない。これが教育の「自己目的性」である。

知識・技能・教養の総体としての文化にも「手段性」と「自己目的性」の二つの側面がある。文化の「手段性」と「自己目的性」は、ブルデューのいう「必要性からの距離」(Bourdieu, 1984, pp. 53—6) の大小を軸にして、その両極に位置する。「必要性からの距離」が増すにつれて「自己目的性」の側面が強まり、「距離」が減るにつれて「手段性」の側面が強まる。教育の「自己目的性」と文化の「自己目的性」は密接な関連をもち、互いに不即不離の関係にあるが、一応、区別しておく必要はあろう。また、教育の「手段性」と文化の「手段性」は全く別のものである。「手段としての教育」の側面からは、職業威信の獲得が目的として位置づけられるのに対して、「手段としての文化」の目標は、各職業における職務の遂行にかかわるものである。また、文化の「手段性」と教育の「目的性」は無関係なものでは決してない。たとえば、学習者にとってある文化の習得が別の何かを獲得するための手段として位置づけられていたとしても、それを習得することがいったんは自己目的化されねばならない。教育が「自己目的性」の契機をもたなければ、文化は、いかなる性格のものであれ、習得されることはない (ただし、このことは学習することの「自覚化」「意識化」とは関係ない)。文化の「手段性」とは、習得されて身体化され、身体のなかに定着したあとで、はじめてその「手段性」を発揮し得るものなのであって、それを習得する以前の段階での「手段性」は、社会的に実在しない。

文化の「自己目的性」と「手段性」を両極とする「必要性からの距離」の軸は、文化威信の格差を形成する軸でもある。いわゆる「世俗的な利害」や「目先の利害」に囚われないという「超越化」の迂回路をたどる「文化」ほど、高い文化威信を享受する。そして、高い文化威信をもつ「文化」ほど、その習得の自己目的化の度合いが高くなると考えられる。文化の「自己目的性」は、このようにして教育の「自己目的性」と密接な関連をもち、「自己目的性」という側面からみたときの教育のあいだの序列は、文化威信の序列を反映する。「自己目的としての教育」は文化威信を介して特定の「文化」につながり、その「文化」を志向する趣味・嗜好によってライフ・スタイルをかたちづくる。

以上のように、教育を「手段性」と「自己目的性」の二面において捉えると、教育の結果として個人に与えられる「学歴」にも、ライフ・スタイルと同じく、職業威信と文化威信の二つが反映していることになる。そして、この二つの威信にもとづく2種類の序列化の軸は、「学歴」という標識の序列化にも、それぞれ (関連はあるもの

の) 別箇に作用している。つまり、職業威信の序列を反映した「学歴」序列と、文化威信の序列を反映した「学歴」序列の二つである<sup>(3)</sup>。学歴は、単にライフ・スタイルを表示するだけのものではない。双方の関係は、もっと錯綜している。「学歴」は、一方において、それにみあう文化威信と、一定の「文化」への趣味・嗜好を通じてかたちづくられた「ライフ・スタイル」をとともわなないかぎり、「地位表示機能」(天野, 1983)をもち得ない。また、他方において「学歴」は、「手段としての教育」の有効性の序列に見合う職業威信をもつ「職業」を通じて、ライフ・スタイルを支える経済的・社会的条件が充たされなければ、「地位形成機能」(同上)をもったことにはならない。逆に、「ライフ・スタイル」は、一方において、「自己目的としての教育」を通じて結果的に獲得された「学歴」という標識をとともわなければ、文化威信の序列の中でのみずからの位置を確定し得ず、たとえば「若者文化」といった「世代」による曖昧な区分によって、ライフ・スタイル相互の境界が不明確になってしまう。また、他方において「ライフ・スタイル」は、「手段としての教育」を通じて獲得された「職業」による経済的・社会的基盤という支えをもたなければ、脆弱なものになってしまう。特定の「ライフ・スタイル」が閉鎖的な「身分」の形成に至るためには、「学歴」が文化威信と職業威信の双方を、同時に、しかも実質的に表示し、それによって他のライフ・スタイルとの格差の存在が示されることが条件となる。

#### 4. 「身分」形成の兆しはうかがえるか？

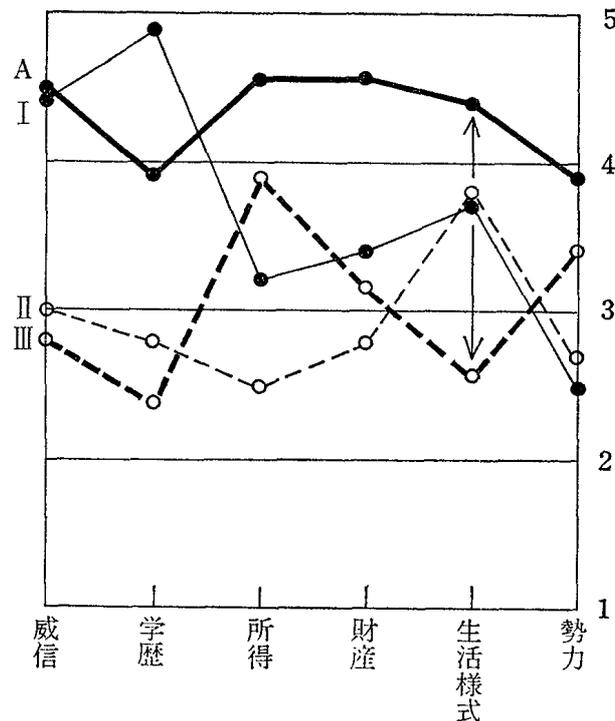
教育を介して閉鎖的な「身分」が形成される兆しが日本にみられるか否か——この問題の考察にあたっては、3. から二つの条件が抽出された。第一の条件は、「手段としての教育→目的としての職業威信→職業→生活様式を支える経済的・社会的基盤」のつながりが、特定の「生活様式」(ライフ・スタイル)において、他とは隔絶したかたちで成立しているか否か。第二の条件は、「自己目的としての教育→特定の「文化」を志向する趣味・嗜好の形成→生活様式」のつながりが、特定の「生活様式」において、他とは隔絶したかたちで成立しているか否か。

1975年 SSM 調査にもとづく今田高俊と原純輔の論文「社会的地位の一貫性と非一貫性」(富永編, 1979)は、この問題の考察に興味深いデータを与えてくれる<sup>(4)</sup>。まず、今田と原の分析を要約しておこう。

今田と原は社会的地位を規定する変数として(職業)威信, 学歴, 所得, 財産, 生活様式<sup>(5)</sup>, 勢力の六つを選び、それぞれを5段階に尺度化してクラスター分析をおこない、六つの階層クラスターを析出している。このうち、ここでの議論に関連をもつ四つのクラスター、すなわち、出発クラスターとしての「I」とその到達クラスター「A」、出発クラスター「II」とその到達クラスター「III」の階層センター・パターン(図2)と、それぞれのクラスターの属性(表1)を示しておく。

学歴と生活様式の間連についての今田と原の分析は次のようにまとめられる(187

## 現代における「身分」と教育



- (注) 1. 引用論文の図から、ここでの議論に関連する四つのクラスターのみ示してある。  
 2. 引用論文の図とは異なって、ここでは出発クラスター I (細実線) とその到達クラスター A (太実線), 出発クラスター II (細破線) とその到達クラスター III (太破線) という線の区別をおこなっている。

(出所) 今田・原, 1979, 173頁

図 2 階層クラスター別の階層センター・パターン

~8頁)。

- ① 「生活様式と学歴」の相関(積率相関係数.339)は「威信と学歴」(.446)に次いで高く、①'学歴が高くなれば文化的な生活様式にかんする知識・情報も豊かになり、その機会の享受にかんする志向も高まると考えられる。
- ② 生活様式は職業威信ともかなり相関しており(.317)、②'学歴が職業威信を経由して文化的な生活様式の水準に介入する度合いがかなり高いと考えられる。
- ③ クラスター I では、生活様式は学歴よりも低く位置して所得と一貫的なパターンを示し、③'余暇生活機会の享受に対する経済的裏付けとしての所得の重要性を暗示する。
- ④ ただし、所得と生活様式との相関はあまり高くないので(.226)、④'経済的資源が豊かでありさえすれば生活様式の水準も高くなるとはいえない。
- ⑤ 年若い年齢層を中心とするクラスター I, II のあいだには、職業威信や学歴に大きな階層的格差があるにもかかわらず、生活様式の水準は一致しており、⑤'

表 1 各階層クラスターの属性

出発クラスター	到達クラスター
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">クラスター I</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">クラスター A</div>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 事務的・専門的・管理的職業従事者</li> <li>● 一般従業者で役職なし、もしくは中間管理職</li> <li>● 高学歴のエリート・ホワイトカラー</li> <li>● 20—30歳代</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 上層を形成するクラスター</li> <li>● 専門的・管理的職業従事者</li> <li>● 上級ノンマニュアル</li> <li>● 高学歴</li> <li>● 高所得</li> <li>● 40—50歳代</li> </ul>
<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">クラスター II</div>	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; display: inline-block;">クラスター III</div>
<ul style="list-style-type: none"> <li>● 事務的・熟練的・半熟練的・販売的職業従事者</li> <li>● 一般ノンマニュアル、マニュアル</li> <li>● 一般従業者で役職なし、あるいは現場監督など</li> <li>● おもに高卒</li> <li>● 20歳代が中心</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 一般ノンマニュアルとマニュアル、農業</li> <li>● 一般従業者、個人・自由業主、自営業主</li> <li>● フォアマン</li> <li>● 中卒と高卒</li> <li>● 比較的高所得</li> <li>● 40歳代を中心とする30—50歳代</li> </ul>

(出所) 今田・原, 1973, 174—81をまとめたもの

これは生活様式にかんする世代的変化のあらわれだろう (生活様式にかんする「世代的分配規則」)。⑤'しかし、現在は一致しているクラスター I, II の生活様式の水準は、年齢とともに次第に学歴主義的分配効果があらわれて (I→A, II→III), I と II のあいだである程度の格差が生じることは間違いないだろう。

まず、「身分」形成を促す第一の条件について検討してみよう。①, ②にもとづく②'で示されている「学歴—職業威信—生活様式」のつながりが確かであれば、第一の条件は充たされていると考えてもよいだろう。今田と原が⑤'で示している見解 (生活様式にかんする「学歴主義的分配規則」の顕在化) は、この裏付けと解釈することができる。しかし、⑤にもとづく⑤'の見解 (生活様式の「世代的分配規則」) は、これを否定するものとも考えることもできる。

結論を先取りしていえば、生活様式も、「世代的分配規則」より「学歴主義的分配規則」に従っていると考える方が妥当なようにおもわれる。今田と原が生活様式の水準のちがいを「世代」によるちがいとして捉えたのは、おそらくその「文化」的側面に着目したからであろう。文化に関しては、「児童文化」「青年文化」「若者文化」と

## 現代における「身分」と教育

いうように、世代（というよりは年齢層）による区分がよくおこなわれる。しかし、「若者文化」というときの「文化」は、特定の年齢層に特有の「行動様式」を意味していることが多く、その年齢段階を通過して中年・壮年の段階にさしかかったときまで持続する行動様式とみなすのは妥当だろうか。また、「風俗」としての「若者文化」は、たちまち「若者ファッション」として商品化されたように、文化の領域に固有の論理よりは、経済の領域に固有の論理によってかたちづけられ、変化していく側面を強くもっている。したがって、世代や年齢によって区分された「文化」は、ブルデューのいう「身体化されたハビトゥス」の層にまでとどく、持続性のある性向の体系を形成するとみなしてよいものだろうか。ここでいう「世代的分配規則」は「年齢分配規則」と同義であり、しかも、暦年齢それ自体は、一定の生活様式を支える経済的・社会的条件を直接的に規定するものではないだろう。

今田と原は、慎重に、生活様式が年齢とともにⅠはⅡに、ⅡはⅢに、そのまま変化していく、とは断定していないが、現在一致しているⅠとⅡのあいだに、将来は格差が生じていくと推測する。この推測は十分なリアリティをもっている重要な指摘だと思われる。生活様式に関しては、現在の状態と将来の見通しとのつながりについての個々人の「主観的に思念された意味づけ」（ウェーバー）が重要だろう。たとえば、20代、30代の人が、自分の職場の40代、50代の上司に10年先・20年先の自分の姿を重ねあわせてみると、上司の生活様式と現在の自分の生活様式とのあいだにかなり大きな格差があったとしても、現在のその格差は、自分にとっては将来も乗り越えることのできない絶対的な「身分」格差だ、とは感じないであろう。むしろ逆に、人はⅠに属していれば、Ⅰ→Ⅱのつながりのなかで、Ⅱに対して大いなる「期待」とときには「反発」を感じながら、Ⅱに属している人ならば、Ⅱ→Ⅲのつながりのなかで、Ⅲに対して大いなる「反発」とときには「悲哀」を感じながら、将来の自分の姿を重ねあわせるのではないだろうか。Ⅰに属する人とⅡに属する人とは、同年齢層で現在は類似の生活様式をもちながらも、学歴と職業威信の階層的格差ゆえに、決して同一の「身分」に属しているとは感じないのではないだろうか。

このように考えれば、生活様式に関しても、ⅠとⅡの類似性よりもⅡとⅢの格差の存在の方に注目すべきであり、職業威信と同じく「学歴主義的分配規則」にしたがっているとみなす方が妥当だと思える。教育を介した「身分」形成を促す第一の必要条件は、このデータでみる限り、充たされているといえないこともないだろう。

では、教育を介した「身分」形成の第二の条件に関してはどうか。今田・原の分析のなかで述べられている①にもとづく①'や、③③'④を承けた④'の見解は、この第二の条件にかかわるものではあるが、断片的な推測にすぎない。

第二の条件について考察するためには、最初からこのテーマに絞ったデータを収集する以外にはない。まずそれぞれの「文化」「余暇活動」のあいだに文化威信の面でのどのような格差があり、どのような序列が形成されているかが明らかにされねばなら

ない<sup>(6)</sup>。この場合、ブルデューのいう「必要性からの距離」という軸が妥当か否か、さらにそれ以外の軸を設定する必要の有無も考えに入れておかなければならない。次に、この文化威信の序列と職業威信の序列との対応関係を調べてみる必要がある。仮に、この二つの威信の序列がかなり安定しているとしたら、特定の「職業」に特定の「文化・余暇活動」が「ふさわしい」といった社会的通念の成立していることが十分に考えられる<sup>(6)</sup>。第三に、趣味・嗜好にもとづいて個々人が実際におこなっている「文化・余暇活動」と、個人のそれ以外の属性（職業、学歴、年齢、性別……）との関連の問題である。これに関しては、第一、第二の作業によって各「文化・余暇活動」を整理すれば、既存の調査データでもかなり使えるだろう。そして第四に、趣味・嗜好の世代間の再生産・継承の問題がある。その際には、特定の「文化」への趣味・嗜好の形成は、経済的・社会的条件によって規定される度合いが高いのか、それとも、そうした、いわば文化「外」的な要因ではなく、文化自体のもつ慣性力（ブルデュー、1968）によって継承・再生産される度合いが大きいのか、検討する必要があるだろう。

第一、第二の作業を踏まえてはいないにせよ、第三、第四に触れた各種データを眺めてみると、余暇活動・文化活動には本人の学歴や職業による差がみられる<sup>(7)</sup>、また父親の職業と本人の余暇活動・文化活動<sup>(8)</sup>、親の余暇活動・文化活動と本人のそれとのあいだの関連<sup>(8)</sup>も認められる。だとすれば、問題となるのは、その関連がどの程度閉じた系を形成しているか、ということである。そこまで踏み込んで議論したときに、本稿の最初に提起した問題——現代の日本において新たな「身分」形成の兆しはうかがえるか、という問いへの答えが用意されることになるだろう。

## <注>

- (1) ウェーバーの「階級と身分」についての議論は周知であるが、以下の議論の下敷きとして、やや長くなるが引用しておきたい。

身分状況とは、人間諸集団にとっての社会的名誉に関するシャーンズを意味するが、そのシャーンズは、第一次的には、それらの人間諸集団の生活様式の（したがって、多くは教育の）相違によって制約されている。が、第二次的には——この点で支配の諸形態の用語法と関係をもつことになるが——支配権、あるいは、なんらかの収入ないし営利に関するシャーンズの独占が当の社会層に法的に保証されている事実と関連をもっていることが多く、典型的でもある。したがって、ある「身分」とは、〔……〕生活様式と、習律的な独自の名誉観と、法的に独占をみとめられた経済的シャーンズとによって（……なんらかの形のゲゼルシャフト関係として）結合されているような人間集団である。そして、それらの集団間における交際と通婚とが、同一の身分に属するという評価があたえられるための典型的な特徴であって、それらが行われないのは身分が異なっていることを意味する。これに対して「階級状況」というのは、第一次的には経済に関連をもつ類型的な状況、つまり、一定の財産所有・あるいは欲求されている仕事の熟練に制約された、生計および営

## 現代における「身分」と教育

利に関するシャンスを指し、また他面で、それから帰結する一般的・類型的な生活諸条件をも指すことになる。「身分状況」は「階級状況」の原因ともなりうるし、結果でもありうるのであって、必ずそのどちらかだというようなことではない。

〔……〕 現今の社会はとくに階級的な分化が顕著であり、しかも特殊に営利階級の姿をとる度合が大きい。けれども、「教養」層の独自の身分的威信というかたちで、きわめて判然とした身分的分化の要因（外面的には、学士号所有者の経済的独占や彼らの社会的優先の機会にいちばんはっきりと現れている）をも包含している。（ウェーバー、1972、94—6。一部訳文を省略したり簡略にしてある）

- (2) これに関しては、『再生産』の第一部の「教育的権威」および「学校教育制度」に関するブルデューとパスロンの議論（Bourdieu & Passeron, 1977, pp. 11—31, 55—67）、イギリスにおける教育社会学の学問としての正統性獲得過程についての分析（バーンステイン、1985、171—4頁）を参照。
- (3) 天野（1983、47—8頁）は、用語こそ異なるものの、これと同じことを述べている。「地位形成機能の強弱による学校歴の序列と、地位表示機能にかかわるそれとは、けして完全に重なりあうものではなく、教育の大衆化や高学歴化が進めば進むほど、重なりあわない部分が大きくなっていくとみてよい。なぜなら地位形成機能における学校歴が、ひとよりも高い地位を獲得するための手段であるのに対して、地位表示機能における学校歴は、ひとよりも高い社会的地位にあることを表示する手段……であればよいからである。……地位表示機能の場合には……、顕在的・潜在的なカリキュラムをふくむ『学校文化』の違いが、重要な意味をもっている。つまりそこでは学校は、社会的な地位の差異を表示するにふさわしい文化をもっているかどうかによって序列づけられ、選択されるのである。そしてそうした「差異表示記号」としての学校文化を、より鮮明なかたちでもつのが公立学校よりは私立学校である……。……アメリカと日本で、最近……私学ブームが起こっていることは、その意味できわめて象徴的である」（強調点は引用者）。確かに日本でも、昭和40年代半ばすぎから50年代前半にかけての大学進学率の急上昇期を経て、それが一段落し、国立大学の「共通一次」が始まったあたりから、受験生の志望大学選択に、単なる「偏差値序列」だけではとらえきれない別の選択基準が作用し始めてきたという印象を筆者はもつ。たとえば、「日東駒専」とか「JAL(R?)・パツク」といった軽妙なネーミングは、同程度の文化威信をもつ「文化」という点で共通しているグルーピングがおこなわれていることを暗に示しているように思われる。もしこれが事実であるとしたら、新たな「身分」形成の一方の条件の充足（共通の趣味・嗜好によってかたちづくられるライフ・スタイル）に深いかかわりをもつことになる。そして、さらにそれぞれのグループ毎に出身家庭の経済・社会的階層の偏りや閉鎖性が存在するとしたら、経済的・社会的格差の正当化に、新たな「身分」格差が機能し始めたことになるといえないだろうか。以上の観点からの受験生・在学生の志願校選択のパターンに着目した学校分類はまだおこなわれていない。
- (4) 『日本の階層構造』（富永編、1979）に収められている他の諸論文が、地位達成の手段としての側面から教育や学歴を捉えているのに対して、この今田・原論文における教育や学歴の位置づけは微妙である。それは、「地位の非一貫性問題」の検討という問題設定が、日本における階層構造を把握するためであると同時に、社会的不平等の正当化の原理にもかかわる理論的射程を含んでいるからである。同書の別の箇所でも今田（1979、91—2）は、産業社会における「社会システムにとっての機能的要請である階層化（不平等の制度化）と市民社会的要求としての平等化とのあい

だの最適なバランスを実現するために分化させた原理ないし制度」として「機会均等の原理」と「分配規則の多次元による画一的な不平等構造の解消」の二つを挙げている。前者の原理にもとづいて教育や学歴が手段として位置づけられるのに対して、後者に立脚して設定される「地位の非一貫性問題」では、学歴は年功序列、世代、年齢とともに社会的資源の分配規則のひとつに数えられている一方で、社会的地位を規定する地位変数のひとつとして社会的資源のひとつにも位置づけられているようにおもわれる。「学歴」の扱いが微妙に感じられるのはそのためである。

- (5) 生活様式スコアは、9項目について、「かなりある」「少しある」「ない」に2点、1点、0点を与え、合計点をカテゴライズして5点尺度を構成したという。9項目とは、①映画鑑賞、②食事に招く・招かれる、③ゴルフ・テニス・ヨット、④登山・ハイキング・スキー、⑤小説・歴史物の読書、⑥二泊以上の国内旅行、⑦海外旅行（出張をかねたものを含む）、⑧芝居見物・コンサート・展覧会、⑨楽器演奏・けいこごと（長唄・小唄・民謡など）、である。

ここで問題となるのは、この9項目がどのような基準によって選ばれたか、という点である。それぞれの項目の特徴のちがいについては、日常感覚に頼って眺めてみれば、なんとなくイメージが浮かぶ（たとえば、③は「高級なスポーツ」というイメージ）。しかし、「ゴルフ」には文化威信だけでなく、職業威信の反映も認めないわけにはいかない。その点で「ヨット」とは異なる性格をもつように思われる。また、「出張をかねた海外旅行」とそれ以外の私費による「海外旅行」は、年齢層も職業も大いに異なることが考えられる。さらに、余暇活動には、経済的・社会的条件の充足だけでなく、それを志向する趣味・嗜好の形成と技量の習得を前提にするものと、そうでないものがある（たとえば「楽器演奏」は前者）。要するに、「文化威信」の序列とその基盤については、理論的な検討を経て、これ自体、独立したテーマとして経験的に研究しておく必要がある。

- (6) 筆者も参加している首都圏の大学生を対象にした調査（宮島喬・藤田英典ほか、1986年春実施、執筆時点では集計中）では、各「文化活動」の文化威信に関連する質問（「上品」か否か）や、各「職業」とのイメージのつながりを調べる項目を盛り込んである。
- (7) たとえば、経済企画庁『生活時間に関する調査』、総務庁『社会生活時間調査』など参照。
- (8) たとえば、宮島・田中、1983参照。

#### <参考文献>

- 天野郁夫「教育の地位表示機能について」『教育社会学研究』第38集、1983、東洋館出版社
- バーンステイン、B.『教育伝達の社会学』1985、明治図書
- ブルデュー、P.「知の場と創造投企」ジャン・ピヨン編『構造主義とは何か』1968、みすず書房
- 「文化資本の三つの姿」『アクト』No.1、1986、日本エディタースクール出版部
- Bourdieu, P., *Distinction*, 1984, Harvard Univ. Pr.
- & Passeron, J.-C., *Reproduction*, 1977, Sage.
- , *The Inheritors*, 1979, Univ. of Chicago Pr.
- 今田高俊・原純輔「地位の一貫性と非一貫性」（富永健一編、1977所収）
- 宮島喬・田中佑子「女子高校生の進学希望と家族的諸条件——『文化的』環境を中心

現代における「身分」と教育

- として——」『お茶の水女子大学女性文化資料館報』第5号，1983  
成瀬治「身分制社会」『大百科事典』第14巻，1985，平凡社  
園田英弘「学歴社会——その日本的特質」『教育社会学研究』第38集，1983，東洋館  
出版社  
富永健一編『日本の階層構造』1979，東京大学出版会  
ウェーバー，M.『宗教社会学論選』1972，みすず書房